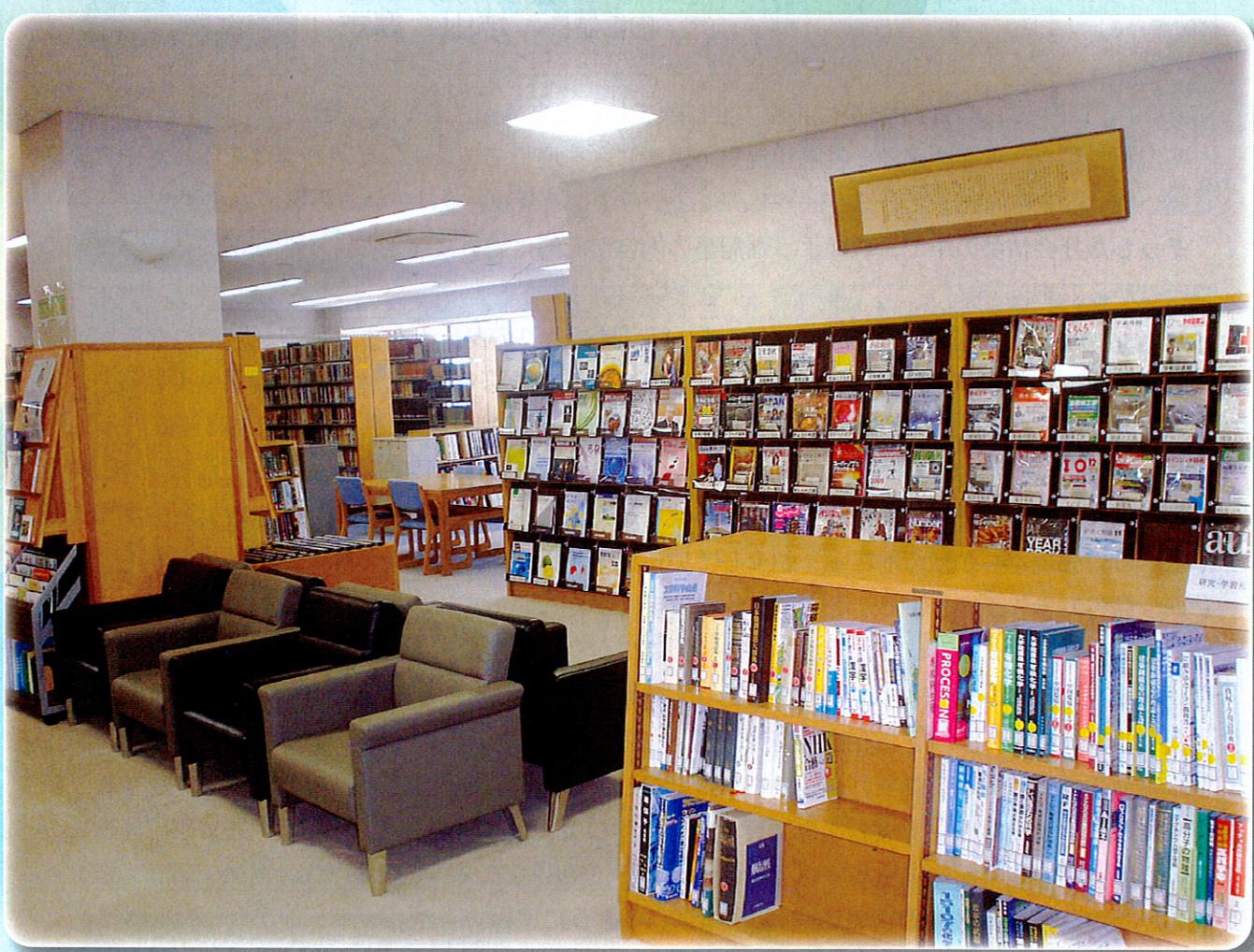


有明高専

# 図書館報

No. 15



## 目 次

巻頭言	2
「私の薦める一冊の本」紹介文	3~7
教職員推薦図書	8
美術ギャラリー作品紹介	9~10
図書館統計	11
郷土の文化財・編集後記	12

## 卷頭言

### ～「巣ごもり」の冬 活字復権の好機となるか～

図書館長 燃山 廣志



2009年 平成21年も日本経済は不況の波に飲まれたままで過ぎ去りました。

不況が長引き、大学や高校の就職状況も一層厳しさを増しています。有明高専はそうした中で非常に高い就職内定率を誇っているとは言え、少なからずこの余波を受けているのも否めません。

こうした社会情勢の中で、次のような記事の内容が記憶に残っています。1年ほど前の毎日新聞のコラムからです。

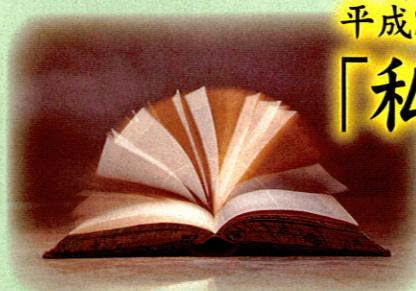
「深刻な不況で海外旅行やホテル越年が減った『巣ごもりの冬』となっているが、これを活字復権の好機と思いたいが、実は現実は逆風が吹き募っている。雑誌や書籍の休廃刊が相次いでいる」と、このコラムの著者は記しています。そしてそれから今回、引用したいと思った一文が続きます。

「今年の学校読書調査で一箇月に読んだ本の数が小学生の平均で11.4冊と過去最高になった。これが高校生になると『一冊も読まなかった』が半数を超える。小学生の読書志向は、学校で一斉読書活動が広がり、先生たちが積極的に本を紹介している効果が大きい。家庭で本を読み聞かせてもらった経験が、読書好きの子を育てるこどもデータから明らかだ。一方で、中学、高校生の6～7割は、最近、読書を勧められた経験がほとんどないという。ここが鍵だろう。（中略）広大な活字の海に人をいざない、知を共有することは、得がたい喜びのはずだ。」（毎日新聞 平成20年12月29日 余録）

と、このコラムの著者は一文を結んでいます。実際に平成21年4月に文部科学省より報告された「学校図書館の現状に関する調査」結果の中で「全校一斉の読書活動の実施状況等」の項を見ますと学校で「全校一斉読書活動」が実施されているのは小学校で97.9% 中学校で88.3% 高校で39.7%とあります。そのうち「朝の始業前に実施しているもの」は小学校で89.9% 中学校で81.9% 高校で31.2%とあります。この数字が上記の記事の裏付けになっているように思います。

一方で、有明高専に目を移しますと、学生の読書意欲を喚起できることがもっともっとあるのではないかと思えてきます。「本を読む楽しさ」を伝える【仕掛け】が必要なのだと考えています。上記の記事や報告書にあるような「全校一斉読書活動」を始めることもひとつの方針かもしれません。私はそれをひとつに限るのではなく、多様な【仕掛け】を学生に投げかけることから、有明高専らしい独自の取り組みが生まれてくるのだと信じています。そのためにも機会を見つけて試行錯誤を繰り返しながらも模索を続けていくことが一番大切なことではないでしょうか。

そのひとつの試みが、今年より新たに始めた【私の薦める一冊の本】という、400字の有明高専生によるブックレビューのコンテストです。初回にも関らず、308編という非常に多くの作品の応募があったことに、大きな手ごたえと今後の読書の取り組みへの光明を見る思いになりました。これからも有明高専の学生に「本を読む楽しさ」を伝える【仕掛け】を続けていきたいと思っています。そして、なによりもその【仕掛け】に学生諸君が意欲的に乗ってきてほしいと強く願っています。



平成21年度

# 「私の薦める一冊の本」紹介文

## 講評

図書館長 燃山 廣志

「巻頭言」でも触れたが、今年より始めた新しい取り組み、400字の有明高専生によるブックレビューの応募に308編という予想を大幅に上回る数の作品が集まり本当に感激した。

とりわけ3年生の応募者の多さは特記すべきことだと思う。これらの作品を各学科より選出して頂いた先生方の協力を仰ぎ、40編に絞る第一次審査を行い、それから第二次審査でさらに今回入賞となった10編に絞る手筈を取った。この一連の審査の流れは決して片手間でやれるような容易な仕事ではないことは、実際にこの審査に加わればすぐにわかることがあるが、それでも関らず今回の審査を手伝って頂いた先生方からそのような声は皆無だった。「学生の今読んでいる本がわかりおもしろかった」「学生の考え方方が短い400字の中に凝縮されていて興味深かった」等のうれしい感想を聞かせて頂いた。私自身が二次審査でこの業務に携わり、その先生方の声の意味が実感出来たのである。

400字という限られた字数で本の紹介をする事は、予想以上に難しい。その本のあらすじや、本を読んでの所感を書き連ねるだけですぐに分量に達する。つまりこのブックレビューには自分の、この本を読んで他人に伝達したいとの情報を大胆にそぎ落とす力量が求められるのである。これだけは伝えたいというぎりぎりの選択は結局は、自分自身がその本とどう対峙したかの姿勢が問われていることになるのである。今回選出された10編の作品のどれもが、学生の、対象とした「書への熱い思い」が強く読み手に伝わってくる。その書を手にしたことがない者に読んでみたいという気持ちを抱かせてくれる内容であった。今後もこのような取り組みを通してさらに学生諸君の「書への熱い思い」を聞かせてもらいたいと願わざにはいられなかった。

最後に、この新たな取り組みに対して、たくさんのブックレビューを応募してくれた学生諸君に、そして審査等の労を厭わず支援して下った教職員の方々に深く感謝申し上げたい。

## 入賞者

機械工学科	5年	柿原 隆宏	『ホタル帰る』
電気工学科	3年	岡 鮎美	『死神の精度』
物質工学科	3年	中嶋 夏美	『重力ピエロ』
物質工学科	3年	西田 絵美	『High and dry (はつ恋)』
物質工学科	3年	山下 修平	『最後の一句』
建築学科	3年	田中 智穂	『風の吹く場所』
建築学科	3年	山崎 春菜	『とるにたらないものもの』
2年1組	角田 雅季	『青空のむこう』	
2年3組	竹内 朱里	『つらいときに読む本』	
2年4組	川村 美萌	『13歳の黙示録』	



# 入賞作品紹介

赤羽礼子 石井宏  
ホタル帰る



## 『ホタル帰る』

赤羽礼子、石井 宏著

機械工学科5年 柿原隆宏

この本は、特攻隊員や、軍の指定食堂である富屋を始めた鳥浜トメさんの二女礼子さんやトメさんの孫の口述、今は亡き鳥浜トメさん直筆の手紙をはじめ、戦争中の日記、写真その他、貴重な資料により書かれたもので、当時のことをそのまま偽りなく書かれている。丁度、私達と同年代の20歳前後の特攻隊員が唯一の憩いの場である富屋で過ごした出撃までの数日間のこと。出撃してからトメさんがその親へ宛てた出撃を知らせる手紙。エンジン不調のため知覧に引き返した後の特攻隊員の複雑な心境。トメさんの優しさ。その全てがこの本の中に詰まっている。

当時の事実をそのまま書いてあるので、次々と吸い込まれるように読むことができる。知覧特攻平和会館を訪れた人も訪れた事のない人も是非読んでもらいたい1冊である。会館までつながる石灯籠の意味。観音像が建立された理由、会館に集められた遺品の数々。この本を読む前と後では全く見え方が変わる。

ACCURACY  
OF  
DEATH  
ISAKA  
KOTARO



## 『死神の精度』

伊坂幸太郎著

電気工学科3年 岡 鮎美

「死神」の仕事は、「死」の対象として選出された人間を調査して、本当に死ぬべき人間かどうか判断することである。苦情処置の部署に勤める女、やくざの男、人殺しの若者など、不規則に選出された人間の生死を、死神は調査し、判定を下していく。

この本は、短編小説集で読みやすく、話同様に関係性がある部分もあり、話同士につながりを感じるのが、読んでいて面白い。気が遠くなる程の長い間、死神は人間の生死を判断してきた。そんな死神と人間の生死に対する価値観の違いも書かれており、新鮮さを感じる部分もある。その価値観の違いから見えてくる人間の愚かさなども書かれている。

また、死神にも人間と同じように個性があり、いろんな性格の者がいる。そんな死神たちには、共通してちょっと意外な好きな物がある。その死神たちが好きなちょっと意外な物にも注目して読んでみてほしい。



## 『重力ピエロ』

伊坂幸太郎著

物質工学科3年 中嶋夏美

春が2階から落ちてきた。これはとある家族の物語である。兄は遺伝子関連の会社で働いている泉水、弟・春は謎多き人物であり、優しい父と美しい母…彼らは「最強の家族」であった。そんなある日、町で放火事件が多発。春が言うに、放火事件の現場の近くには数日前に必ずグラフィティアートが見つかるらしい。グラフィティアートと連続放火事件の謎。この謎解きに参加した泉水は驚くべき真実に辿り着くのだった。

印象的な文で始まる本作品は冒頭から読者を魅きつける力がある。謎解きと言ってもそこまで小難しいミステリーではなく、どちらかといえば展開が読めてしまうが、最後には家族とは何なのかを改めて考えさせられる。本当に科学とか遺伝子とかでは説明できないことがあるのだと思われる。兄弟の会話が洒落ており、いたるところに伊坂作品らしさが散りばめられている読みやすい作品となっているので、ぜひ読んでいただきたい。



## 『High and dry(はつ恋)』

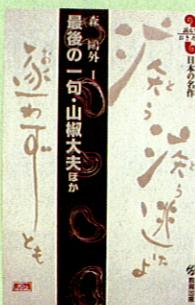
よしもとばなな著

物質工学科3年 西田絵美

14歳の秋。少女は恋をした。生まれて初めて恋をした。それは、はつ恋だった。純粋な気持ちで人を好きになった。相手は20代後半の絵の教室の先生だった。歳の差なんて関係なかった。好きになってしまったのだから。恋に歳の差なんて壁はない。その恋は、ちょっとずつ、ちょっとずつ少女と先生は心の距離を縮めながら仲良くなっていく。しかし、そんなふたりに、やがて小さな奇跡が訪れる。その小さな奇跡とは一体ー。

はつ恋というものの甘酸っぱさや初々しさや真っすぐさなどが感じられ、恋というものの本来の良さが感じられる本である。また、内容だけでなく目でも楽しめる魅力がある。それは、カバーや本文に描かれてあるイラストだ。いろいろな昆虫をモチーフに可愛らしく描かれてある。その絵の世界に引き込まれたのがこの本を読むきっかけとなった。

独特な可愛いイラストと甘いはつ恋の物語はあなたの心をあたたかくしてくれる。



## 『最後の一句』

森鷗外著

物質工学科3年 山下修平

船乗りの桂屋太郎兵衛には、5人の子供がいる。桂屋一家は太郎兵衛が罪を犯し、入牢してからずっと世間から軽蔑されてきた。ある晩、長女の「いち」は、とうとう父の死罪が決まったことを立ち聞きし、父を助けることを決心する。翌日、まつ、長太郎と共に奉行所に願書を持っていくが、引き取ってもらえず、数日後に情偽がないか取り調べが行われることになった。家族が次々と尋問され、ついにいちの番がきた。そこで彼女は奉行様に鋭い「最後の一句」を放つのだった。

昔の話なので多少分かりにくいところもあったが、読むほどに伝わる臨場感から、鷗外の表現能力の秀でていることが感じられた。弱冠16歳にして、尋問にも屈さず、大人のような立ち振舞をしながら反抗しているいちの姿は貴重、いや、未恐ろしささえ感じたほどだ。しかし、いちの献身的行動は現代人、特に若者にはぜひ見習ってもらいたいものがある。



## 『風の吹く場所』

松岡充著

建築学科3年 田中智穂

この本は、主人公「秀幸」の小学生の頃からの様々な出来事を書いている小説だ。

小学生の頃は、イジメにあつたりすることもあるが、秀幸はとても強い男の子で、イジメにも負けないような子だった。

また、秀幸の家族のこと、恋愛や学校のことなども書いてある。その中で秀幸が最後に行きつく風の吹く場所は、どこなのかな…。

私はこの本のタイトル『風の吹く場所』とは、色々なことを表しているのではないかと考えた。人生において言えば、風はどんな時でも吹いていて、私たちに色々なことを運んでくる。嬉しいことであつたり、時には寂しいことであつたり。読む人によって、このタイトルの感じ方は違うと思うけれど、私は風によって運ばれてきいくつもの幸せな場所みたいなものを考えながら、この本を読んだ。

読み終えた後、私はこれから的人生に多くの勇気をもらえた気がした。踏み出せない一步を踏み出せるようになるような本だと思う。



## 『とるにたらないものもの』

江國香織著

建築学科3年 山崎 春菜

とるにたらないけれど幸せに満ちているもの。例えば、私にとってはパンとおにぎり。パンには、見る・選ぶ・食べる楽しみがあるが、おにぎりにはどの楽しみもない。しかし、おにぎりを食べている時は、私の体中に広がる計り知れない幸せがある。感じ方は人それぞれだと思う。江國さんは、そんな身のまわりの不思議で魅力的なもの60について簡潔な言葉で綴っている。簡潔な言葉なのに、大きく深く私のイメージは広がっていく。

江國さんが綴る60の中に「黄色」や「輪ゴム」などがある。私にとっての「黄色」と江國さんにとっての「黄色」は違う。読んで初めて気づく「黄色」がある。また、私は気づかなかつた「輪ゴム」の魅力。読まないとずっと気づかなかつたであろう「輪ゴム」の生命力。この本を読んだ後に輪ゴムを見ると、不思議と輝いて見えた。その目で隣にあったポン酢を見た。何だかポン酢まで輝いているように見えた。不思議な一冊である。



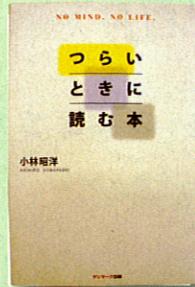
## 『青空のむこう』

アレックス・シラー著

2年1組 角田雅季

交通事故で死んでしまった主人公、「ハリー」。話は、彼が〈死者の国〉で受付の列に並んでいる所から始まる。受付を終えると、人々は地図を受け取り、〈彼方の青い世界〉に向けて出発し始める。〈死〉が最後ではないのだ。しかし、心の準備ができていない人、つまり、やり残したことがある人々は、〈彼方の青い世界〉には行けずに、〈死者の国〉で歩きまわっているのである。ハリーもその一人になる。そして、そこで出会ったアーサーと共に、やり残したことをする為に、〈彼方の青い世界〉へ行く為に、〈生者の国〉を目指して駆け出すのだった。

生と死について書かれている話だが、全然重苦しくなく、とても爽やかな気持ちで読み進めることができる。そして、ラストは、本当に心がじんわりとあたたかくなり、こんな気持ちは初めてだと思えるはずだ。読書が苦手な人も、この本を読めば、大好きな一冊になるだろう。



## 『つらいときに読む本』

小林昭洋著

2年3組 竹内朱里

この作品の著者である小林さんは、ある日体の機能が失われていく病気にかかってしまう。病気に対する恐怖、とまどい、苛立ちに毎日押しつぶされそうになる。そんな生活の中で、どうして前向きに強く生きれる様になったのか。その理由が分かる作品である。

病気にかかって苦しんでいる人はもちろんだが、それ以外の人でも、気持ちがきっと軽くなると思う。この作品を読み終えると、明日からまた頑張ってみようかなという気持ちになった。私が想像している以上に、つらく苦しい経験を小林さんは体験しているのだろう。そんな経験をしている人だからこそ、著者のことばは心に響いてくる。

悩みがある人、今つらい思いをしている人など、様々な人にこの作品を読んでもらいたい。前に進むためのヒントが何かみつかるかもしれない。



## 『13歳の黙示録』

宗田理著

2年4組 川村美萌

私は『13歳の黙示録』という本をおすすめします。

中学の国語教師になって2年目の「秋元千佳」は、はじめて担任をすることになったのです。しかし持つことになったクラスには「升本幸雄」という問題児がいました。ベテラン教師たちが彼を避ける中、千佳は持ち前の熱意で幸雄の心を開いていきます。しかし彼はとんでもない事件を起こしてしまうのです…。

普段本を読まない私ですが、中学生の時にこの本と出会ってからというもの、この本の内容を忘れたことはありません。「非行」をテーマに、13歳の少年と先生の心境やまわりの人々、環境がとてもよく描かれており、私は非常に興味をそられました。テーマや話の起承転結もありきたりかもしれません、当時の私にとってとても衝撃的でした。今でもこの感動が忘れられないで、みなさんにぜひ読んでいただきたいと思っています。



### 図書情報管理部室員・一般教育科 田中 彰則

今回、「私の薦める一冊の本」の紹介文を寄せて頂きましたが、400字という限られた字数で本を紹介するのは本当に難しいことだと思います。核心部分を明かすことなく、他の人が手にしたくなるように本の内容を紹介するためには、十分な読解力と文章力が必要です。さらに自分の感想・意見を加えることで紹介文自体が一つの作品となりえると思うのですが、これには十分な知識・教養・個性と自分の内面を表現する力が必要です。私は最終審査に携わりましたが、どれも素敵な作品ばかりでした。早速紹介して頂いた本を読んでみようと思います。

### 機械工学科 南 明宏

今回、初めて『私の薦める一冊の本』紹介文の審査員をさせて頂きました。従来の読書感想文とは視点を変え、紹介文を読むことで、その紹介された本を学生もしくは私自身が読んでみたいと感じる度合いの強さで選考させて頂きました。400字という短い領域の中で、感動したシーン、印象的なフレーズ等を巧みに集約された紹介文が数多く見られたと思います。反面、前半の滑り出しは好調ながら「後半の結びが今一歩」あるいは内容は素晴らしいけれども残念ながら「誤字脱字が目立つ」という紹介文もいくつかありました。

最近は時代劇関連の小説ばかりしか読まない私も今回の審査を期に色々なジャンルの作品を読みたいと思います。

### 電気工学科 池之上 正人

書店に行くと、手書きやPCで作成したPOP（広告、コメントカード）をよく目にします。皆さんも、このPOPを見て本を購入した経験があるのではないかでしょうか。POPには、その本を読んだ感想などが短い紹介文の形で書かれており、この紹介文により、客に同じ「価値観」を持たせることができるかがポイントとなります。このためには自分が感じたことを自分の言葉で表現することが最も重要だと思います。

今回の「私の薦める一冊の本」もこのPOPに似ています。皆さんの紹介文を読んで、私も同じ「価値観」を持った作品が多数ありましたので、早速読んでみたいと思います。

### 電子情報工学科 嘉藤 直子

昨年の読書感想文の審査に引き続き、今回の紹介文の審査にも参加させていただきました。どの作品も興味深く読ませていただきましたが、まず、皆さんのがジャンルを問わず、様々な本を読んでいることには大変驚かされました。また、作品については、皆さんのがお薦めする本というだけあり、どれも力作揃いでました。特に、本のあらすじだけでなく、現在の自分と比較して意見を述べている作品や、本の内容とは別の視点から眺めて書いている作品などが、私には面白く感じられました。

全体的には、昨年度の読書感想文よりも熱意のこもった作品が多かったように思います。来年度も期待しています。

### 物質工学科 出口 智昭

選考を終えて今回の企画は読書感想文とは違い、本を真剣に読めば書けるというものではなく、本を読んで感じたことを本の内容、特に結末は明かさないようにして、その本の良さを他人にアピールし、読みたいと思わせるような文章を書かなければならぬいため、文章の構成や表現方法などかなり難しかったのではないかでしょうか？実際に審査をしていろいろな表現の方法や文章構成を考えた作品が多数あり、選考も困難でした。また、私自身実際に読んでみたいと思う作品も数多くありました。今後、時間があれば読んでみたいと思います。

### 建築学科 薮 敏和

今回、新しい企画であり、どのような作品が応募されてくるのか、楽しみにしておりました。期待どおり、たくさんの応募があり、どの作品も、図書の内容を真摯に受け止め、どのような点からその図書を薦めるのかがうまく表現されていました。しかも、取り上げられた図書は多岐にわたり、想像力をかきたてさせられる作品ばかりでした。昨年までの感想文と比べると、文字数は半分になり、感想文よりも取り組みやすいと考えていましたが、文字数が減った分、思いを充分に表すこと、まとめることが難しかったのではないかと感じました。残念なのは、1年生からの応募が多かったのですが、入賞者の中に1年生がいなかつことです。次のチャンスでは頑張って下さい。



昨年4月以降に新しく着任された先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読ませたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦していただきました。ここで紹介する本は、図書館にも揃えていますので、ぜひ手にとってみてください。

## 『異国の客』

池澤夏樹 著  
集英社

建築学科  
切原 舞子



私は近い将来、フランスに移住したいと考えているのですが、現実的にそれが可能なのか？住める国なのか？を知るために読み始めた本です。本書は、フランスへ移住した著者のエッセイで、その内容は、「その土地を拠点としてものが見えること、世界のからくりがわかることが大事なのだ」にあるよう、朝市の食材からはじまり、EU憲法、そして世界時事問題までと、様々なレベルで思索をめぐらせた、入り易く、かつ非常に奥深い、豊かなものになっています。

この本はもちろんおすすめなのですが、自分の「好き」を中心に、そこから派生させて、身の周りの事を改めて見直してみる、勉強してみる、そのための「読書」はいかがでしょうか？苦手だと思っていた物理・数学、背を向けていた国語・英語・社会が、実は自分の「好き」と関連していることがわかつて、一変、魅力的に見えてくるかもしれません！

## 『赤と黒』(上下)

スタンダール (著)  
野崎 欽 (翻訳)  
光文社古典新訳文庫

一般教育科  
菱岡 憲司



いまからもう18年も昔、まだ高校生だったころ、とあるお嬢様学校に通う同い年の女の子と知りあつた。お互い読書好きと分かり、本を紹介しあうことに。その時借りたのが、スタンダール『赤と黒』（大岡昇平訳、新潮文庫、上下巻）。まったく歯が立たなかつた。読書好きとは言え、中学高校では、『水滸伝』『三国志』を愛読する「ますらをぶり」な日々。『赤と黒』の織りなす「たをやめぶり」な恋愛模様に、正直、退屈を覚えた。何もわからないまま、無理矢理、二冊を読み終えた。本を返すとき、偽って「おもしろかった」と答えたものの、碌な感想を伝えられなかつた。

大学に入り、恋愛を含め、いろいろな経験をして、ふと書店で『赤と黒』を目にした。購入して、読みはじめる。おもしろい。主人公ジュリアン・ソレルの矜持と野心、レナール夫人との愛情、天の邪鬼なマチルドの魅力、初読の際、何も感じなかつたのが不思議なほど、スタンダールの綴る物語世界に魅了され、あっという間に読み終えた。そして、はじめて知つた。高校生のころ、もしかしたらあの子がぼくに伝えたく、共有したかったのかもしれない思いを。ぼくはあまりにも鈍感で、その時は何も感じられなかつた。

最近、光文社古典新訳文庫から『赤と黒』（上下）が野崎欽訳で出版された。いい機会なので、また読んでみた。胸が熱くなった。大学生のころとは異なり、少しは客観的に読むことができるようになったが、それでも夢中になって頁をめくる自分を発見する。

いま思う。高校生のころ、『赤と黒』に出会えてよかつた。そして、そのとき分からなかつたことも、いまならよかつたと思える。分からなくても通読したことが、ぼくの人生の財産になっている。何も分からなくても、どんな邪な動機であっても、本を通読するということは、自分のなかに種を植えるようなもの。その種がどんな花を咲かせるかは、その人の歩む人生に委ねられている。ぼくの『赤と黒』は、大輪の花を咲かせた。

# 美術ギャラリー作品紹介

当ギャラリーは本校の「玄関」としての図書館ロビーを有効に活用するための一環として設置されたもので、地域交流の場を提供することを目的としています。

ギャラリーの展示作品は地域在住のプロの作家の方々の手による非常に貴重な作品を貸与、寄贈していただいて展示しています。

展示作品は年に1回入替を行いますが、現在は以下の作品を展示しています。

作品名：土蜘蛛  
作 者：奥苑 和司



作品名：浜辺  
作 者：角 久仁子



作品名：浜  
作 者：木下 潤



作品名：春の温もり  
作 者：木村 和子

作品名：希望  
作 者：木戸 直道



作品名：朝陽阿蘇  
作 者：加治屋 陞



作品名：朝陽阿蘇  
作 者：加治屋 陞



作品名：バレリーナ  
作 者：石井 保



作品名：ドナウバンドの午後  
作 者：松尾 正勝



作品名：祭の日  
作 者：石井 保

作品名：消えゆく立坑  
作 者：寺田 晃洋



作品名：中国の屋根  
作 者：院丸 憲之



作品名：高森  
作 者：永井 正文



作品名：秋の山路  
作 者：坂口 勝夫



作品名：牡丹  
作 者：小川 研



作品名：時をかさねて  
作 者：鶴由 海子

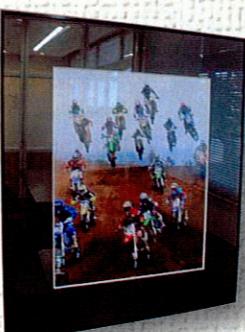
作品名：春の散歩道  
作 者：宗 美津子



作品名：時の流れ  
作 者：高田サダ子



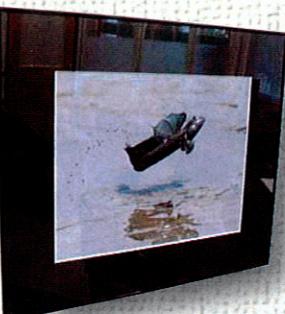
作品名：モトクロス  
作 者：甲斐 友行



作品名：棚田と漁火  
作 者：中村 信也



作品名：ジャンプ  
作 者：宮田 房子



作品名：帰り道  
作 者：満武 康夫



# 図書館統計

## 平成20年度利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	25	24	25	26	19	20	26	23	21	22	22	21	274
入館者数 総数	4,808	5,689	5,887	7,129	3,266	2,683	5,228	6,027	4,052	4,945	5,959	1,532	57,205
(内夜間)	805	1,382	987	1,646	258	0	901	1,123	681	776	976	0	9,535
(内土曜日)	147	259	183	229	144	0	179	506	95	178	181	0	2,101
1日平均	192.3	237.0	235.5	274.2	171.9	134.2	201.1	262.0	193.0	224.8	270.9	73.0	208.8
貸出冊数 総数	486	516	627	513	334	217	481	263	349	443	307	89	4,625
(内夜間)	127	139	110	126	63	0	125	59	84	130	84	0	1,047
(内土曜日)	31	28	25	20	4	0	29	21	4	19	23	0	204
1日平均	19.4	21.5	25.1	19.7	17.6	10.9	18.5	11.4	16.6	20.1	14.0	4.2	16.9

## 分類別図書貸出冊数の推移

年 度	総 記	哲 学	歴 史	社 会	自 然	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	*その他の合計
平成16年度	167	109	107	126	815	2,792	30	289	62	1,452	1,896 7,845
平成17年度	148	49	113	93	763	2,618	13	306	9	1,163	1,889 7,164
平成18年度	114	63	173	140	679	2,179	14	151	26	1,206	2,831 7,576
平成19年度	74	63	53	32	568	1,791	5	61	8	689	793 4,137
平成20年度	88	62	90	67	523	1,756	13	108	48	971	899 4,625
平均	118	69	107	92	670	2,227	15	183	31	1,096	1,662 6,269

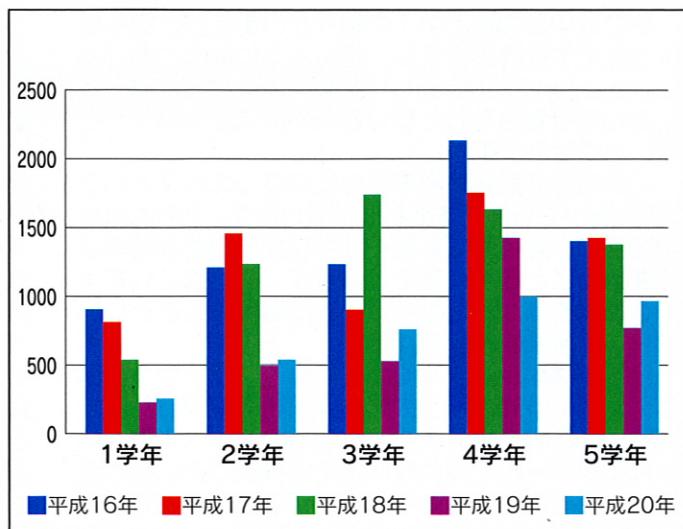
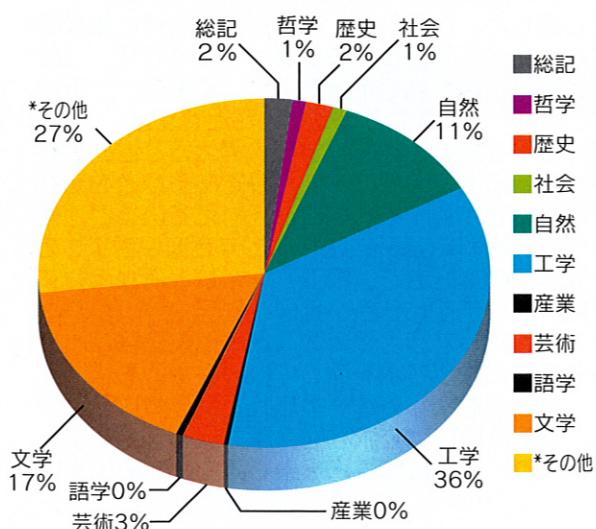
\*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

## 利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況			入館者数		貸出冊数			1日当たりの数値		1人当たりの数値			
		総数	(内学生)	(内教職員)	(内学外利用者)	総数	(内夜間) (土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間) (土曜日)	(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成16年度	271	1,300	1,054	182	64	70,630	15,914	7,845	7,670	2,346	175	260.6	28.9	7.3	6.0
平成17年度	274	1,355	1,063	182	110	63,160	16,037	7,164	6,587	2,022	202	230.5	26.1	6.2	5.3
平成18年度	271	1,273	1,073	175	25	73,033	14,340	7,576	6,893	1,945	222	269.5	28.0	6.4	6.0
平成19年度	235	1,311	1,099	176	36	40,427	4,990	4,137	3,788	759	126	172.0	17.6	3.4	3.2
平成20年度	274	1,306	1,097	165	44	57,205	11,636	4,625	4,061	1,251	232	208.8	16.9	3.7	3.5

## 分類別図書貸出冊数（平成16～20年平均）

## 学年別図書貸出冊数（学生のみの数字）



## 郷土の文化財

### 鳥居

神社を表わす地図記号に鳥居の形が使われているように、鳥居は神社を象徴的に表している。華（花）表と言われる鳥居は一般的に、2本の柱の上部に水平に貫を通し、柱の上に笠木・島木を載せ、貫と島木との間に額東を入れる。また、柱の最下部には亀腹があり、頂部には台輪を造り出すことが多い。鳥居の種類は多いものの明神鳥居が古代から使われている。

旧柳河藩内には17世紀前半までに建立された特徴的な古い鳥居が残っている。それらを以下に紹介していく。

玉垂神社鳥居	みやま市瀬高町河内	14~16世紀	市指定文化財
竹飯八幡宮鳥居	みやま市高田町竹飯	慶長15年(1610)	市指定文化財
三島神社鳥居	柳川市西蒲池	元和元年(1615)	市指定文化財
八坂神社鳥居	みやま市瀬高町上庄	寛永20年(1643)	

玉垂神社鳥居と三島神社鳥居は笠木先端の形状が独特で肥前鳥居と言って明神鳥居の中で区別され、三島神社鳥居は肥前鳥居の典型と言われている。玉垂神社鳥居には額東に円形の浮き彫りがあって珍しい。柱に年代が刻まれていないので年代は不明であるが、この地域では最も古い鳥居である。

竹飯八幡宮鳥居と八坂神社鳥居は明神鳥居である。竹飯八幡宮鳥居は柱の頂部が下部に比べ極端に細く、素朴な造形である。八坂神社鳥居は他に比べて立派で、笠木・島木が柱から大きく出て、その反りは強い。

上記の年代が古い鳥居では貫が高い位置にある。これらよりも新しく、プロポーションが整った各地の神社に残る鳥居と比較すると違いがよくわかる。

(建築学科 松岡高弘)



玉垂神社



竹飯八幡宮



三島神社



八坂神社



### 編集後記



私には中2の娘と中1の息子がいますが、彼らはまったく本を読みません。読むように勧めても「他におもしろいことがあるし」と言い訳し、最後には「本を読んだり勉強をしたりして何の役に立つの?」と言います。始末です。

この科目の勉強が将来何の役に立つか?という質問は学生さんからもしばしば受けます。われわれも、学習目標や到達度に気をくばりながら授業を効率よく進めることを常に考えています。これはこれで大切なことです、この考えのみに縛られることに何か寂しさを感じてしまいます。

皆さんはペレルマン博士を知っていますか?彼はボアンカレ予想という数学の大問題を解決した数学者です。この功績により、数学会のノーベル賞といわれるフィールズ賞が彼に与えられることになりました。さらに多くの有名大学が彼を教授として招こ

うしました。ところが、彼は名誉ある賞と教授職をなんとすべて辞退し、こう言ったそうです。「証明が正しければそれで十分であり、表彰などが不要なことは、誰もがわかっていることです。」

何の役に立たなくとも、学び、考えること、それ自体が生きる上での喜び、楽しみであることを忘れずにいたいですね。こんなことを考えていると、側を小らの末娘が本を読みながら通りすぎていきました。彼女は無類の本好きで、廊下、トイレと所かまわず本を広げています。そういうば、先日、ブックハンティングと称して図書委員数人と本屋を訪れたとき、彼らも夢中になって本を探していました。もしかしたら、本を読む楽しみを一番忘れているのは私なのかも。有明高専には立派な図書館もあることですし、足を運んで、週末には読書を楽しみたいと思います。(T)